

f c t

GAZETTE

1986.2

vol. 5

Number.20

ガゼットは
テレビと市民
のデータバンクです

編集・発行／子どものテレビの会（FCT）神奈川県葉山町長柄1601-27 責任者／鈴木みどり

銀行口座 第一勧業銀行逗子支店（普通預金口座 1425785） 郵便振替口座 東京9-84097

購読料／年間（4回発行） ¥1,500円（送料¥240） 一部¥400

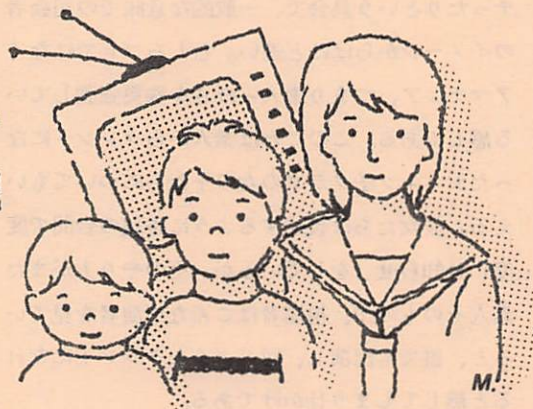
■特集1

狙われる女子高生

「夕やけニャンニャン」にみる子ども観

FCTでは第5回テレビ診断を1985年10月14日（月）～20日（日）の一週間、在京民放キー5局とNHK総合の計6局で午後6時～10時に放送された全番組とCMを診断対象にして実施した。テレビ診断の際には毎年テーマを定め、そのテーマの下に番組及びCMの分析調査を行っているが、今回は「テレビと子どもの人権」というテーマでドラマ、バラエティ番組、ニュース番組、CMの4領域にみる子どもの扱い方、描き方、子ども観を点検してみることにした。

「夕やけニャンニャン」（フジテレビ月～金）は高校生や中学生を視聴対象にする生情報番組で、視聴率も同年令層で28.4%と高い（ニールセン調査、診断週間中）。そこで、この番組は5時～6時の放



送ではあるが調査対象に加えることにし、さらに比較の対象ということから、同じ5時台の同種の子ども向け情報番組「思いっきり中学生（NHK総合、木）、「鶴ちゃんのいちごチャンネル」（テレビ朝日、土）、「バクバクおこさまランチ」（TBS、日）の3番組も合わせて分析を行うことにした。

分析調査の結果は5時台の番組比較も含め報告書にまとめて4月初旬に刊行の予定で、目下、作業を続けている。以下では、中間報告として「夕やけニャンニャン」の内容を一部紹介する。

■CONTENTS■

○特集1 狙われる女子高生

「夕やけニャンニャン」にみる子ども観……1

○特集2 FCT 8周年記念シンポジウム記録

子どもの人権について考える……4

○テレビ環境研究会メディア教育講座1

アニメ・ヒーローと暴力……8

○まともな話は出来ないテレビ

昼の芸能番組 怒りの出演記……10

○fct データバンク

国内篇……12

カット 市川雅美

プロとアマの無境界化—校内放送の延長

「タヤけニャンニャン」は月曜から金曜の毎日、ナマで放送されている。そのレギュラー出演者を見ると、中・高生の間で絶大な人気のとんねるず（男性2人）とこの番組から生まれ育った女子高生グループのおニャン子クラブ、それに松本小雪が司会役で加わっている。この他に曜日によって吉田照美、土尾昌巴、稲川淳二、布川敏和、田代まさし等のラジオのパーソナリティや歌手が出演している。出演者は松本小雪に代表されるように肘をついたり、そっぽを向いて話したり、度々トチったりという具合で、一般的な意味での司会者のイメージからはほど遠い。むしろプロではなくアマチュア、つまり素人っぽさを殊更強調している感じである。このことは素人からタレントになったおニャン子クラブの女の子たちについてもいえる。彼女たちは後述するように番組の合間で度々「お知らせ」をしているが、そのやり方がまた素人そのもので、視聴者はこんな出演者を見ると、誰でも出演し、同じようなタレントになれると感じてしまう仕かけである。

さらに、お知らせが入るといっても、その後ではとんねるずが走り回っていたり、会場の参加者を笑わせる仕草をしていたりする賑やかさ。正に、中学や高校の校内放送といった手軽さで、遊びっぽく企画されていて、それが若い視聴者にうける要因となっている。

もう一つの特徴は番組がほぼ百パーセント中・高生の視聴者参加で構成されていることだ。番組に応募して出演する者、会場にやってきて応援する者、タイムンテレフォンへの電話による参加(表参照)、出演するタレントを見にくる者といった直接的な参加。さらにハガキや写真を送る、街頭で呼びとめられVTRに撮られる等の参加形態がある。しかし、これだけ視聴者の参加に頼り切った番組でありながら、中・高生の立場や意見を尊重する番組作りが行われているかといえば、まったく逆で、とんねるずをはじめ「大人」出演者の態度は驚くほど尊大。子どもたちは「こいつ」呼ば

わりされ、バカにされ、あるいはかけてきた電話を乱暴に切られてしまったりと、さんざんな扱いを受けている。

セックスアピールで決まるタレントへの道

この番組の曜日ごとの構成及び内容は次ページの表にみる通りだが、この中から月～金の毎日放送する「ザ・スカウト・アイドルを探せ」の内容を少し詳しく紹介してみる。このコーナーは歌手やタレントになりたい普通の女子高生が応募するもので、レオタードや水着姿になって毎日審査を受け、その結果を金曜日に発表する。合格すればおニャン子クラブに仲間入り出来、タレントへの道が約束されるということで、応募者の数は非常に多いという。

その内容だが、月曜日は2人の人間が体をびったりつけてやっと入れるような細長い透明のボックスを用意し、その中にとんねるずの一人と応募者を入れ、いろいろ質問をする。木曜日は各応募者についてプロの手になると思われるプロモーションビデオを作成し、放映する。その内容は応募者がシャワーを浴びていたり、ベッドの上でポーズをとったり…といった代物。つまり、歌唱力ではなくセックスアピールのいかんが審査されているわけだ。こんな審査で誕生したおニャン子であれば、彼女たちの呼び名といい、持ち歌の歌詞といい、あるいは彼女たちのスカートの中を狙うカメラアングルといい、すべてが性の商品化そのものといった扱いになるのも当然。これではプレイボーイ誌のバニーガールを白昼堂々、公共の電波を使って募集し審査しているのと同じではないか。しかも相手は女子高生。子どもの人権、女性の人権をこれほど侵害しているテレビは世界広しといえども珍しいのではないか。

番組のすべてが子どもを狙うCM

提供広告主を記すとサントリー、大塚食品、ビッグカメラの3社。さらに番組を中断して3～7本のスポットCMが6回も入る。このCMの中にはフジテレビの番宣、同局主催の国際ツーリング

表. タヤけニャンニャンの構成及び内容一覧

1985. 10. 14~18

曜日	構成	内容
月	<ul style="list-style-type: none"> ◎およしになってティーチャー ●甲子園に出なくても校歌を歌える ●とんでニャンニャン ●松本小雪の新・東京ガイド ●今日の双子 (スタジオに双子を招く) ◎うしろ指さされ組 (自局アニメの歌) ◎ザ・スカウト・アイドルを探せ ◎ニュースと番組宣伝 3分30秒 ◎なぜの嵐 (自局ドラマの歌) 	<p>(歌)おニャン子クラブ、♪スカートちらり、お色気じかけ…… 小岩高对本庄校 自校の自慢競争をして勝者が校歌を歌う 応募者3人が物真似をし、勝者はおニャン子1人を抱ける VTRで多量の本を置くパチンコ店、南極の石など紹介 中学生の双子の名前を出演者が当てこする</p> <p>(歌)おニャン子クラブ、アニメ「ハイスクール奇面組」の主題歌 アイドルに応募した女子高生がレオタードで審査を受ける 自局の後続のニュース番組の一部紹介と夜の番組案内</p> <p>(歌)おニャン子クラブ、10代ドラマ「スケバン刑事」の主題歌</p>
火	<ul style="list-style-type: none"> ●小雪と土屋さんを明るくするコーナー ●クイズ!おニャン子に聞きました ●君の名は…… (ゲストの人が誰か?) ●おじさん教えて (視聴者のハガキ相談) ●とんねるず5時テレビ (天才バカボン) 	<p>視聴者のハガキを読む。「原がエラーした」「原立つなあー」 おニャン子 (春美)が寝る時じっている物は?(答)クッション CMに登場する中学生がゲスト。CM名とその役割を答える 「オナニーしているところをお母さんに見つかってしまった」 とんねるずがバガボンとパパに扮してナンセンスに演ずる</p>
水	<ul style="list-style-type: none"> ●ブエルトリコの魂、無敵のボボ来日 ●部分美人コンテスト / (街頭VTR) ●ゴッド伊藤のヘビメタ講座 ●雨の西麻布 そして女は濡れたまま ●いなかっぺ大将 (応募ハガキを読む) ●家の子にかぎって (テレフォンクイズ) 	<p>挑戦者が仮面をつけた正体不明のボボに腕ずもうを挑む 5人の人の顔の部分を取り切りモニターに写真に仕上げる ヘビメタ愛好者3人のヘアスタイルをスタジオで紹介 (歌)とんねるず、艶歌を誇張して歌い、紅白に出ることを狙う これこそが「いなかもののする事」というあれこれを紹介する 会場の子に家へ電話させ合言葉を言う。答えられれば正解</p>
木	<ul style="list-style-type: none"> ●突激タイマンテレフォン ●明るい不幸自慢 (応募ハガキを読む) ●タイマンテレフォン (視聴者参加) ●ニャンニャンフォーカス (写真の応募) ●先生教えて (相談回答者 深田甫) 	<p>生放送中にオールナイトニッポンのもりやさんに電話する 身近に起こった不幸を読み上げ、会場の人たちと笑い合う 電話でタイマン (1対1のケンカ)。ののしりあいの応酬 心靈写真やアイドルが写った写真を見て恐がったり喜んだり 先生の無駄話が多くて困る。やきもちやきの性格を直したい</p>
金	<ul style="list-style-type: none"> ●保沢家の人々 ファミリードラマ寸劇 ●保沢先生あのね 相談回答者 保沢紀 ●タニャンオリコンベスト5 湯浅明 ●タヤけ演芸会 トリオ・ザ漫才 ●YNN海外ウィークリー 米国の情報 ●フックンのフライデー (布川敏和撮影) 	<p>本、チケット等買ってほしい物をお父さん(保沢)にねだる 「おじぞうさんはなぜ立っているか」答「土台があるから」 ラジオのパーソナリティーである湯浅が歌のベスト5を発表 とんねるずと新田たまきの古漫才 デイブ・スペクターが伝える。熱気球とスコアボードの裏側 しぶがき隊のひとりが写した楽屋裏の写真をみんなで見る</p>

注) ◎印は毎日あるもの。但「うしろ指さされ組」は水曜に「雨の西麻布」が入るため水曜を除き毎日

カー耐久レース等のCMも毎日ある。

番組の中ではとんねるずが自分の他局番組やコンサートの宣伝を巧みに入れ、おニャン子は自分たちのレコード、本の宣伝、クラブ入会の誘いを毎日やっている。彼女たちの歌う歌もフジのドラマとアニメのテーマソング。諸外国ではテレビの

商業主義から子どもの人権を保護するのが潮流になっているのに(ガゼット17、18号参照)、日本ではすべてがCMと化した子ども番組に対してさえ大人たちの多くは無関心を装いつけている。

(まとめ・永田順子)

特集2. FCT 8周年記念シンポジウム記録

子どもの人権について考える

テレビと切りはなして考えることは出来ない

1985. 11. 30 於東京飯田橋

いじめ、そして学校の過剰管理をめぐって、子どもの人権という言葉がマスコミに多くとりあげられている昨今、FCTでは子どもの人権について考える時テレビとの関わりと無縁ではない、という立場に立って、8周年記念シンポジウムの企画をたてた。テレビの内と外から子どもの人権を考えてみよう、という試みである。

当日のスピーカーは以下の通り：

鈴木孝雄氏 — 東京弁護士会少年法委員会副委員長。子どもの人権 110 番担当

三井マリ子氏 — 都立野津田高校教諭。

豊原隆太郎氏 — 東京テレビ制作局演出部。

鈴木みどり — FCT

当日は師走を目前にした忙しい時期にもかかわらず、主婦、学生、教諭など多くの参加者があって、切実な子どもの問題をめぐる対話が続いた。

今、子どもの悲鳴であふれている

鈴木孝雄 東京弁護士会が9月からはじめた「子どもの人権 110 番」は、子どもの人権を守ろうという立場に立って電話相談をうけているもの。はじめてから11月迄の間に約 445 件の相談があり、そのうち 231 件がいじめに関連した相談で、深刻なものが多かった。例えば、いじめられて学校へ行けない、これは教育を受ける権利が侵害されていると考えられる。いじめる側からの相談は1件もない。

わかった事は、親や先生に言えないでいる子どもがいかに多いかという事。せっぱつまり、自殺を考えるまでに追いつめられた子どもに気付かない大人たち。「昔もあった」「安易で弱い子どもが自殺する」などと言う大人たちがいるが、もっての他である。シンナーを吸えば補導されるが、他の子をいじめた子は、放っておく大人。こうして長い間いじめを放っておいた事が現在の状況を引き

起こしている。問題は子どもとの信頼関係がなくなった親や先生にある。相談を受けた親や先生が中途半端な解決しかせず、状況を増々悪くし、結果として子どもたちを黙らせてしまった。多くなった少なくなったではない。例え0.1%でもいじめがある事は良くないと考えるべきである。

ではどうしたらいいか。親が気をつける、警察に介入してもらう、この程度の事ではもはやだめ。基本的に子どもとは何かという点から考え直さなければならない。学校教育法における学校教育の目的は「学校内外の社会生活の経験に基づいて人間相互の関係について正しく理解し、自主自立の精神を養う」となっている。今の学校は、この第一の目的は片手間、もっぱら一流大学、一流会社を目的に受験勉強に追いつけている。子どもたちは虐待され世の中はこれを平然と見ている。この虐待された子どもたちがどう出て来るか。ひとにぎりの秀才を育てる為に落ちこぼれをつくっている学校。しかもこのひとにぎりでさえはなはだ疑問である。お金をかけ非人間的戦士を育てる家庭も悪い。

今、はじめて政府がいじめの問題に目を向け始めている。親も考え直す時が来ている。日本国の主権者である自分たちが学校教育をも変えて行こうという自覚をもって、親自身も変わって行かなければならない。

高校生が金妻を好き！とは

三井マリ子 テレビの問題にはいる前に、現場の人間として、いじめの問題に少し触れる。今まで喧嘩両成敗という考え方で対処して来た教師も、最近では、いじめる側、いじめられる側という考え方で対処するようになって来ている。去年、私はいじめる側の子どもを受け持ち苦労した。なにより大変だったのは、いじめの事実がなかなか出

て来なかった事。結局、いじめられている子どもと教師の長い長い話し合いで、やっと信頼関係ができ、いじめの事実が表面化したという経験をした。そのいじめ方はすさまじかった。

私の学校は受験校でなく、おおらかな学校であるが、とうとう出て来たなという感じを持った。

私は普段テレビを見ないが、これを機に、生徒が見ているテレビを見てみた。そして、高1と高3に視聴時間や好きな番組のアンケートをとった。びっくりしたのは、高1で1日に5時間以上テレビを見ている生徒が45人中12人もいた事だ。(この1クラス40人以上の大クラスが、いじめの原因を作ると思うが…)、1年生の大好きなテレビは、
 ・金曜日の妻たち、
 ・たけしのスポーツ大賞、
 ・スクールウォーズ、
 ・たけしの元気の出るテレビ、
 ・夕やけニャンニャン。では、なぜ金妻が好きか、
 ・大人の恋でステキ、
 ・内容が複雑でかっこいい、
 ・次回への期待、という答が返ってきた。

3年生は34人の回答者中5時間以上見る生徒が3人に減っていた。3年生くらいになるとテレビはつまらなくなるのだなと、少しほっとした。3年生の好きな番組をみると、これがまた・金曜日の妻たち、
 ・ひょうきん族、
 ・ベストテン、
 ・なるほどザワールド、
 ・ポニーテールはふりむかないという具合。なぜ金妻が好きかは、
 ・とにかくステキ、
 ・出演者がいい、
 ・実際に近いドラマ、などの答が返ってきた。

金妻、このあくびの出る程退屈なドラマがなぜ高校生に受けているのか。子どもたちにとってこのドラマは、ファッションであり、自分たちも結婚したらきれいな家に住み、適当に仕事を持ち浮気をして、結構楽しく暮らせるに違いない、と漠然とした夢を抱くのだろう。金妻の女性たちはそれぞれ仕事を持っている様子ではあるが、その仕事も、少しは翔んでいると見せる為のアクセサリーに過ぎない。仕事の中での女性の葛藤や成長は全く描かれていない。

キャサリン・ウェイベルの『メディアに縛られた女』第2章・テレビに見られる女性像の中で、女性の職業について詳しく触れない事が生み出す

効果について書かれていたが、その効果は①主婦が女として到達する最終目的である事を観念として与えるのに役立つ、②普通の主婦でいいのだ、時々ドラマティックな事もあるし、楽しく暮らせばそれでいいと、主婦を肯定するのに役立っている。金妻はこのキャサリンの考えにびったりのドラマだと思った。

夕やけニャンニャンを見たいから早く帰るといふ生徒が多いので、これも見た。本当にびっくりさせられた。番組の中の歌の歌詞たるや、「今はダメヨ。がまんして。男は、先生は、私たちに触れたがっている。誘惑したがっている…」など、セックスに関する言葉の連続なのである。夕やけニャンニャンの制作意図は、スターでない普通の人を出し、あなたも出られる、友だちが出ていると、放課後の延長としてテレビを位置づけるということ。

女のステレオタイプは、2,3年前まで女子大生にあてはめられていた。今や、女子中・高生がターゲットになっている。

スクールウォーズに関しては、全てが男性と女性のステレオタイプの連続である。・ラグビーをする男、
 ・洗濯する女、
 ・おにぎりを作る女、
 これらが、これでもか、これでもかと繰り返される。男がメインで、女はそれを支えている脇役にすぎない。100%男の願望でできているドラマである。これを毎日見ている子どもたちが心配だ。

これでもか、これでもかと固定的な性別役割を教える事、セックスが非常にオープンになって来ている。この二点を強く感じた。

大人社会のひずみ、子どもが先取り

豊原隆太郎 金曜日の妻たち、たけしのスポーツ大賞、夕やけニャンニャン、どうしてこのような番組が受けいられているのか。憤りを感じる気持ちもわかる。しかし、固定的な性別役割が受け入れられる状況が問題。大人は子どもの鏡であり、子どもは大人の真似をしているというふうに考えてみる事も大切である。視聴率が上げれば、即、良いスポンサーがつく。いわゆる視聴率競争時代の結果として、こういう状況が出て来ている。大人社会

のひずみを子どもが先取りしてこの現象が表われて来ているのではないか。子どもはいつの時代でも、非常に健康な反応を示すものである。

タヤけニャンニャンは、危険性はあるが、子どもたちは欲求に対して非常に忠実なのではないか。セックスがオープンになり過ぎて来ているという点では、確かにエスカレートして来ているが、活字メディアの方がよりエスカレートしていると思う。テレビでは、ただで家庭に入りこみ、いつでも見れるという面から、若干セーブされているものの、世の中のひずみ、価値観の錯綜がテレビに出ている事は否めない。

どうしてテレビがこうなのかと考えると、テレビの持つ両面性が挙げられる。企業中心に動いているテレビには良心は出て来ない。これは我々制作サイドの反省でもあるが、軌道修正はむづかしい。

ドラマについて言うと、今ドラマが低調である。最大の問題は、今は男性がテレビを見ていない。夜の10時台ですら、在宅主婦の時間帯となっている。その主婦は何が好きか？ 全てデータに基いた番組作りがなされる。視聴者層の調査がシビアになっている今日の問題点は、視聴率を得る為にデータに振り廻され、テレビ局の中である種のパターンを作りあげてしまう事である。

一方、スポンサーはテレビを媒体として見直し始めている。テレビCMは売り上げの向上に結びつかないと考え始めており、スポンサーを得る事が厳しくなりつつある今、スポンサーの希望に即応せざるをえない現状なのである。テレビ界は昔ほど良心的意見が通る状況でなくなっている。

適度に手軽にうける物を良しとするパターンができていと思う。影響力の大きさを自覚しながら大きな力に流される。このような大人の情況が子どもに反映していると考えられる。データに管理され、多勢を管理する方が楽である為、全体で物を動かそうとし、個に対する配慮が欠けている事は確かである。

FCT第5回テレビ診断中間報告

鈴木みどり スクールウォーズあたりから10代を

ターゲットにしたドラマが非常に増えてきた。テレビの中で、これら10代の子どもの人権がどのように扱われているか、子どもたちがニュースやドラマの中でどのように位置づけられているかを考えて、10月14日より10月20日の一週間、午後6時から10時までの時間帯の番組分析を進めている。今回の診断では、特に①CMの中での子どもの扱い方、②ニュースの中の子ども、③子どもが見るドラマやバラエティショーの内容、この三つを柱に分析を進めている。

中間発表ということでこれまでにわかったことをあげると、①10代ドラマだけでなく一般ドラマの中でも、登場する子どもの多くは中高生である、②登場人物の家族背景がとて複雑になっている、③何か特別な事を設定しないとヒットしないというパターンで考える傾向になっている、④問題解決の方法として暴力が多く使われている、⑤セックスがオープンになってきている、⑥子どもの視点でなく、大人と同じ発想の意見を言う大人・子どもが登場し、子どもらしさの喪失が見られる等。

参加者の意見・質問

Q 金八先生制作の時、出演者の子どもたちが演出家の指示より武田鉄矢の言う事を聞いたというが、本当なのか。

豊原 本当です。スタジオの中に疑似学校ができ、武田鉄矢は実生活でも子どもたちに「先生」と呼ばれ、いろいろな相談など受けていた。大変良い雰囲気だった。

Q 先程、三井先生が触れられた40人学級への疑問とは？

三井 今、一人っ子が非常に多く、家庭において母親が100%子育てをしている。ところが学校では先生1人に対して40人の子どもたちがひしめいている。母親との密着度の濃い子どもは1対1で自己を表現できても、多人数の中では自己を表現できない。生活の中の人間密着度と学校でのそれとのアンバランスが生じて来る。

Q 現在のいじめにおける加害者は、ごく一般的な子どもであると新聞に書かれていたが。

三井 私の学校の場合は、加害者は例外なく問題児である。

鈴木孝雄 いじめる側はほとんど問題児である。ただし、リーダーである問題児の力が恐ろしい為一般的な子どもたちがいじめる側についてしまい、結果として、いじめてしまうという事はある。

Q 子どもなのだからある程度保護するという意味で見るテレビを制限するとか、非行児童から遠ざけるという配慮についてはどうお考えですか。

鈴木孝雄 隔離は自主自立を妨げる。例えば、中国から帰国した子女は無菌状態で皆良い子であるが極端な方向に陥りやすい。子供期に隔離して見るテレビを決めたりすると、その後で混乱を起す。自分で選ぶ力、判断力をつけさせるべきである。

三井 制服を着せて隔離しておく事による反動も同じです。

司会 『中学生になぜ制服か』の著者、久世さんに伺います。お子さんに制服を着せなかったのは…久世 学校という場が特別な場とされて、服装を決めて管理する。これは、制服を買うのにお金を出す親までも管理されているということです。私は裁判闘争や運動はやらなかった。裁判所で判決が出たから、それに従って制服を着ないというのでは、主旨に反する。根本は、親が子どもを学校に管理してもらい、それを喜んでいる限りどうにもならない。テレビに関しては、子どもを学校管理から開放してくれる役目もあると思うが…子どもの人権は自由権である。これが守られている限りそこに解決はあると思う。

鈴木孝雄 校則というのは、細かい事が多く決められているから問題というのではなく、規則だからと子どもに問答無用で適用する事が問題である。基本的には、決める側と守る側が同じでなければならない。子どもの参加が必要。

Q クラスの少ない学校をつくるのは無理なのか。小さい学校が良いのか、大きい学校でもクラスが小さければ良いのか。

三井 大きい学校になると必ず管理が必要になってくる。しかも、学校として「一丸となって」が好きな先生が多すぎる。アメリカやヨーロッパで

はほとんどが20名のクラス。

鈴木孝雄 荒れた学校はことごとく大規模校だ。

10代の子どもに社会性あるドラマを

鈴木みどり 今回の分析で、ドラマに登場する子どものパーソナリティを調べているが、「大草原の小さな家」の子どものみが社会性を備えていた。ドラマの中に社会的視野を取り入れることを今のテレビに期待できるか。

豊原 60年代のテレビには社会性があった。今は社会性あるドラマはない。それは、テレビが男の物でなくなったから。企業としての放送局は、「女性は社会性が好きでない」というデータにより動かされている。

鈴木みどり 子どもの人権とは何かという基本を考えず、ただ子どもを出し、ストーリーを組み立てるドラマが多すぎるのでは…

Q 今の若い視聴者は目が肥えている。やらせに関して、知らないのは大人で、子どもたちは見抜いていると思うが。

参加者 子どもは見抜いているからといってやらせがあってはならない。くだらないテレビは見なければ良いでは、片付けられない。実際多くの子どもが見てテレビから生き方を学んでいる。やはり、もっと多様で良いものを望みたい。

豊原 常に考えてはいるが、その基準をどこに置くかに悩んでいる。

鈴木孝雄 テレビと人権、これは大いに関係がある。子どもの人権とはまず、かわいそう、悪い、きれいといったことをストレートに見る目を養うところから大切に育てていくことである。人権とは個人の尊厳、人間性の確立に他ならない。

三井 日本のテレビは依然ボーイズ・ビ・アンビシャスの世界だ。女の子もアンビシャスであるべき。子どもの社会性を育てるテレビを期待したい。

(まとめ 桑野啓子)

アニメ・ヒーローと暴力

FCTでは創設以来の懸案となっていたメディア教育のためのテキスト開発に本格的に取り組むため、85年10月、この領域でアメリカやアジア諸国を中心に活動しているTAT (Television Awareness Training)日本委員会と協力して「テレビ環境研究会」を作り、日本のテレビ環境に即したメディア教育講座の組み立て作業を開始した。テキストには講座の他にテレビ・メディアについての知識を楽しみながら学べるクイズなども入れ、また指導用マニュアルも作成し、完成の暁には指導者養成のワークショップを開くなど、多々、企画している。以下に講座(試案)の一つを紹介し、読者から実施してみたの感想、意見を期待したい。

★ ★

目標 子どもが好んで見るアニメーション(アニメ)番組にはさまざまな暴力が描かれ、しかも暴力場面も多い。親と子がこの点を意識し、特に子どもたちのヒーローとなっているアニメ主人公がどんな暴力にかかわっているかを知ること、それが暴力肯定の考え方につながる可能性について考える。

用意するもの 子どもの間で人気のあるSF調アニメ番組の後半20分を収録したVTRと暴力分析シート(次ページ)。

活動 参加者にまずVTRを見せ(必要なら2~3回)、各自に暴力分析シートの記入をもらう。子どものグループや学校のクラスを対象に行う時は黒板を使い、一緒に書き出してみるのもいい。暴力の分析を終えた後、参加者は3~5名のグループに分かれ、話し合う。

話し合い

問1 ずい分たくさんの暴力場面が出てきましたが、この番組を見て、あなたはどうか

感じましたか。

- 恐かった 暴力が多く驚いた
 スカッとした 不愉快な気分になった

問2 どんな暴力が一番多かったでしょうか?

問3 暴力を行う人(行為者)は良い人と悪い人のどちらが多かったですか?

問4 暴力の結果について、テレビで描かれていた場合と実際の場合とでは、どう違うでしょうか。(あんなに殴ったら、実際なら大怪我をする、あんな武器を使えば、実際なら相手は死んでしまう等、各々の暴力場面について虚構と現実の違いを点検してみる)

問5 主人公が使う暴力はどのように正当化されていたでしょうか? 暴力を使わないで問題を解決する方法はないか考えてみましょう。

発展学習

- 子どものグループを対象に行う時は、まず各自に好きなアニメ主人公の名前をあげさせ、次にアニメ主人公の暴力を真似したことがあるかを質問する。その結果はどうなったかを話し合う(友だちや自分が怪我をした等)。
- 暴力分析シートの記入を宿題にして、VTRではなく番組の一つ選んで家で記入するように指導して、その結果を持ちより上記の話し合いをするのもいい。

アニメーションの暴力分析シート

番組名

モニター日時 月 日 時 分～ 時 分

	誰が(行為者)	誰に(被行為者)	どんな暴力を行ったか(暴力の種類)	その結果どうなったか(暴力の結果)
例	ウルトラマン	モグラ怪獣	殴り、たおし、破壊光線を発射	怪獣が死んだ
1				
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				

<まとめ>

• 描かれていた暴力の種類と回数

- | | | | |
|---------------|---|-------------------|---|
| 1. 銃等の武器を使う暴力 | 回 | 2. 殴る、蹴るの身体的暴力 | 回 |
| 3. 言葉による暴力 | 回 | 4. 暴風雨等の自然現象による暴力 | 回 |

• 暴力で相手を死なせてしまった人物名

• もっとも暴力的だった人物名

まともな話は出来ないテレビ

昼の芸能番組 怒りの出演記

11月9日。夕方「TBSのお昼の番組に出て話をしてほしい…」と担当のSさんより電話。過熱する芸能情報番組を斬るというテーマだという。

司会は山城新伍と聞いて、結局何を話してもおちょくられるだけだから否、というのにねばりにねばる。鈴木さんと相談し、ともかくダイレクトにテレビの送り手に発言できるチャンスだから、と永田、桑野さんを口説き、「みんなで出ればこわくない」の戦略で出演OKを出したのが夜10時。

11月10日。日曜というのに早速の打合せ、なにしろ明日放映の生放送なのだ。東京在住の私が請け負ってSさんと構成のUさんに会う。ともかくFCTの活動を紹介する時間をとってほしい、十分に話をさせてほしいと要求する。Sさんソフトなあたりの方で、言いたいことを遠慮なく言って下さいとのことで少し安心した。

11月11日。10時30分に新宿のコメディシアターに集合。(番組はT企画が請負って制作している、というものだった)打合せというより会場の下見。「台本や打合せをしない方が自由に話せるでしょう」と言われてその気になったが、実は筋書きを教えて貰えなかっただけのこと。公開ということも、老タレントやおかまタレントなどなにやらトンチンカンな寄せ集め風タレントがレギュラーで出ていることも行って初めてわかったことだった。12時番組開始。私たちが4人で出かけていったので手強いと見たのか、最初のワンコーナーは司会者氏ががんばってつまらぬおしゃべりをやってCMタイムまで私たちの登場を遅らせて下さった。幕の後ろでモニターテレビを見ながらどうも「悪い予感」よせばよかった、と後悔するが、間にあわない!

CMタイムが終って4人で登場、坐るなり「今日はこわいPTAのお母さん達が…」とやられて怒りがこみあげてくる。昨日打合せであれほど「主婦は」とか「お母さん」というまとめかたで扱

れるのはやめてと訴えたのに、プロデューサーの「わかりました」はどこへどう吹っとなだのか。

他の登場者はみな個人名なのに、中年女性はいつも「お母さん」「主婦」「PTA」でくられることにはがまんがならない。

テレビ朝日のやらせ事件番組に出ていたS芸能レポーターが、この番組にお呼びがかかったということで大張りきり、バカ声をはりあげ、しゃべりまくる。芸能番組なぜ悪い、見る人がいるのだからいいじゃないか、文句あるか、とこちらが何も否定しているわけではないのに全身ハリネズミみたいにとんがっている。口八丁手八丁の芸能人司会者と向う側に居ならぶタレントの合の手に我ら4人あいた口がふさがらないと呆気にとられているうちにさっさと番組は終わってしまった。

ヤクザが出ている?

番組終了と同時に芸能レポーター氏はそそくさと雲がくれ。さすがに気がひけたのだろう、プロデューサーとディレクターは「明後日もう1度やりましょう、今度はちゃんと話が出来るようにしますから…」という。いえいえもうけっこうと1人3000円ずつ頂いて近くの中村屋で遅い昼食をとりながら悪口を言ってストレスを解消。交通費と昼食で足が出てなんと時間のムダをしたことかとげんなりして家に帰った。

玄関を入るなり鳴った電話をとれば先程のSさん。明後日なんとか出てほしいと1時間もねばる。

もうその手にはのりません、とこちらもねばって1時間、やっと初志貫徹した。ところがSさん次々と他の人たちにかかけまくり、根負けした永田さんが条件をつけたうえで出演OKを出したのが12日の夕方。

11月13日。永田さんは田上さんに応援を頼んで同じ会場へ。私はテレビを見守る。番組冒頭、今度は条件をいれて、FCTの活動の内容、連絡先

などを紹介、その後この間と同じ顔ぶれで話しあい開始。ところが、会場に来ていたおばさんを芸能レポーターの隣りに呼びあげて、まったく見当違いな話を延々と始める。要するに、ちゃんとした話を進めようという意図がまったくない、というよりは、議論になることを避けようとする演出なのだ。やっと話の糸口をつかんで、「芸能レポーターが社会正義を背負ってプライバシーを侵害している…」と言うなり芸能レポーター氏は完全に逆上してしまった。「いつ、どこで、そんなことをしたか言ってもらおうじゃないか」「会場に来ていた人の拍手でボクとFCTとどっちが正しいか決めようじゃないか」「おとしまえをつけてもらおうぜ…」とまあガラの悪さむきだし。結局またもや話はなんらかみあわないうちに番組は終わってしまった。

テレビ局にかわりまして……

番組が違って15分もしないうちに電話をかけてきたのは、三鷹に住む主婦と名乗る方。あんまりひどい、かねてから腹が立つことが多かったが、今日の司会と芸能レポーターの態度はゆるせない。

ああいう番組づくりを許さない断固とした態度を表明するように……と延々の励まし40分。

聞いているうちに、「単細胞」の当方も次第に腹が立ってくる。やっと電話をおいたら、今度は金沢からかけているという男性の声。

「あなた方、あんなヤクザを相手にして腹が立ちませんか。おとしまえなんてカタギの人間が使う言葉じゃない、テレビはヤクザがやってるんですか、黙ってちゃだめですよ……」とやっぱり1時間。夕方までに、5本の電話がかかってきて、それぞれ40分から1時間。私はまるで番組の制作者かテレビ局の責任者にでもなったみたい「ほんとそうですね」「すみません」「はい、がんばります」「よくわかりました」……がっくりとつかれる午後だった。それにしても、TBSというところは視聴者からかかってきた電話に、何の断りもなしに私の家の電話番号を教えてまわしてよこすとはひどい。失礼もいいところではないだろうか。

抗議の電話が500本

夕方5時すぎ、プロデューサーのSさんに電話をする。あんまりひどいのでTBSの責任者あてに抗議文を出したいので了承しておいてほしい、と申し入れる。Sさんは少し考えさせてほしいとの返事。あなた方がもう少しはっきりと話をしてくればよかった、と不満げに言われる。

あんなに逆上してわめきたてる芸能レポーターとおちゃらかしの口八丁の司会者相手に、しかもライトのまぶしいところで素人が話をするこのむずかしさをSさんはまったく理解できないようだ。まともな話ほどしにくいというテレビのあり方に抗議しても通じてはいない。

それにしても「いつもは1時間ぐらいで終る視聴者からの電話が、今日はまだかかりっぱなし、500本ぐらいかかっています。番組そのものへの批判というより芸能レポーターへの抗議が多い」というSさんの報告に驚かされた。視聴者がそれだけ意志表示をするということに、救われた思いもする。

肝心のSさんは、番組への批判はなかった、などと呑気なことを言っているが、事態はもっとシビアに受けとめられてしかるべきだ。

同じ頃発売になった「週刊新潮」には、低視聴率にあえぐこの番組をはじめとするいくつかの番組は制作者たちが番組づくりは上の空でスポンサーの顔をうかがい次の企画を用意するのに必死と書かれてあった。下請け会社のつらいところもわからなくはないが……ナルホド、明後日に放映の生番組の出演を依頼してくるという「ドロナワ」の事情はこういうところにあったのかと納得。

後味の悪いテレビ出演から、はからずもテレビの「お寒い台所」をのぞくことになってしまった。

収穫は、テレビに対してきちんと反応し、意志表示をする視聴者が多いということがわかったこと。いま、テレビを作っている人たちの意識の低さと遅れこそ問われなければならない。ことはテレビ朝日だけの問題ではない、とあらためて考えさせられたテレビ出演だった。（竹内希衣子）

FCT テーターバンク

— 国内篇 —

●テレビのある風景、鶴見俊輔、マドラ出版、1985年。

東京タイムズに毎週連載された随筆を集めたもので、1982年～85年に放映されたテレビ番組に対する著者の雑感を通して、現代文化の諸相の中に深く根差しているテレビの本質を追求している。「ひとりの感じかた、ひとりの考え方がしっかりと育つための文化、少数意見がいきいきとゆきかう文化、そういう文化がおとろえるといったんできた大きな流れにそのまま日本人が身を任せるところにゆくだらう。テレビ文化の恐ろしいところは、そこだ(テレビの育てた怪物)」という。

視聴率の高さがそのまま権威とみなされる今の日本文化のあやうい形を育成しているテレビに対する問題意識を提起し、制作者側がその育成の場で怪物と組みうちする方法を工夫してほしいと求める一方、それはテレビを見るひとりの人の見方の工夫でもできる筈だ、という筆者の主張を実践して見せたエッセイの数々。

管理社会である今の日本の現状の産物であり道具でありながら、なにか八方破れのしなやかさを持ち、管理社会の体質を内側から批判してゆく力を持っているとテレビについて述べ、その魅力的な側面を追求している。(H)

●断面'85ジャーナリズム、「新聞研究」No. 413、85年12月。

85年のジャーナリズム状況をふり返り、問題点を整理する特集で7論文から成る。テレビ関係のものをあげると、問われたテレビ報道の批判的視点・藤久ミネ、テレビは筋書きのないドラマを追求せよ・土井泰彦(前フジテレビ報道センター室長)、

映像ジャーナリズムの課題・別所宗郎(共同通信写真部長)、メディア空間の「変容」と新聞・清水克雄(朝日記者)など。

藤久ミネは「報道の芸能化、およびセンセーショナルリズムへの傾斜傾向が、圧倒的な勢いをもって全面的にたちあらわれたのが、1985年のテレビ状況」と総括し、ニュース枠の拡大はニュースをていねいに伝えるためではなく項目数を増やす方向で機能していること、またニュースの芸能的扱いやわかりやすく明るいニュースという非イデオロギー的装いの裏に大きな政治的意図がひそんでいることに着目せよと、奇しくもFCTの報告書「情報化する朝のテレビと主婦たち」とまったく同じ主張を展開している。ただし、テレビ報道のあり方をどう改善するかについては、何故かコマージュリズムの問題に立ち入るのをさげ(この点をFCT報告書では鋭く指摘)、情報選択に「恣意的でない」プライオリティを、視聴率のみで測らない価値観を、テレビ制作者の体質改善と一人ひとりの「回心」が要請されるなど書いて、抽象論で終っている。

清水克雄は「一種の社会的事件のイベント化は日を追ってエスカレートするばかり。あらゆる出来事が一瞬のうちに現象化する時代」と今日の状況を捉え、人びととメディアの関係が大きく構造的に変化しつつあると述べて、好奇心社会の現出を指摘する。好奇心社会ではメディアもまた好奇心メディアへと変身をよぎなくされるというのが清水の主張で、そのような社会にあって、新聞に生き残る道があるとすれば、それは写真週刊誌のように大衆に迎合するのではなく、またそれを無視したり、「孤高」を保つ立場に固執するのでもなく、第3の道、即ち、「好奇心社会の現実を含めた現代社会を情報としてとらえ、それを解説する新しいメディアとして再生する道」をみざすことだ、と述べている。メディア空間

の変容に合わせて変わらなければならないのは、何よりもメディア自身だという主張は、テレビの未来を考える上でも唆暖に富んでいる。(M)

●テレビはコミック雑誌か、「朝日ジャーナル」ライブシンポジウム、1985年12月20日号、朝日新聞社。

ロック歌手の内田裕也が脚本を書き主演した映画「コミック雑誌なんかいない」の完成をきっかけにして企画されたシンポジウムの記録。

出席者はこの映画の監督滝田洋二郎、放送ジャーナリストのばばこういち、芸能レポーターの須藤甚一郎、ロック歌手内田裕也、司会は朝日ジャーナル編集長の筑紫哲也。

自ら私生活上の問題などで芸能レポーターにつけまわされたことのある内田が、日本にしかない芸能レポーターという職業とそれを取りまくテレビの状況に挑戦したいという意図をもって制作した映画について各々の立場から感想をのべることから始めて、今年のテレビ状況への展開が試みられている。松田聖子の結婚騒動、豊田商事社長の刺殺を中継したテレビ、三浦報道をめぐるレポーターたちの過熱ぶり、いずれを見ても日本のテレビは猥雑でありすぎると一般的には認識されている。

芸能情報番組は活字メディアでいえばコミック雑誌、取材する側もされる側もいわば慣れあいのだからとやかくいうことはない、と聞き直る芸能レポーターと……話しあいはずまらないうで終っているが、今年のテレビの状況を考えるひとつの手がかりにはなる。

同じ号に、シンポジウムから頁を続けて「ビープルメーターはテレビ革命をもたらすか」という放送評論家志賀信夫の小論も載せられている。

いまアメリカで広がりつつある新しい視聴率測定器ビープルメーターの紹介をしたもので、これを使うと家族全員がどういう視聴をしているか測定できるものだという。個人視

聴時代に即応したもので、これによってテレビの視聴率の測定は家庭から個人別になり、そのことから視聴者の「質」を見分けた番組づくりが可能になるだろう、と述べている。(T)

●ミスタースペクターの「ドッキリチャンネル」、デーブ・スペクター、「新潮45」1985年12月号。

ABC放送のプロデューサーである筆者が日本のテレビについてさまざまな角度から疑問と苦言を呈して歯切れよい文にまとめている。

鳴りもの入りではじまったテレビ朝日の「ニュースステーション」を見て思わず「なんだよ、コレ?!」と叫んでしまった。大型報道番組というにはあまりにも空疎な内容、レベルの低さである。

天気予報をはじめとして専門的知識を要求されるはずの情報を伝えるのはデパートのエレベーターガールのような女の子ばかり、シロウトがやたらに登場するのも日本のテレビの特色である。といった調子でタモリとたけしに頼り切った番組ばかり制作する芸能番組のおそまつ、ドラマといえば嫁姑や家族の葛藤をテーマにしたものばかりで社会性という視点はすっぽりとぬけている、と鋭く指摘している。テレビが与えてくれるはずの「夢」を追うことをせずひたすら低きに流れる番組を作り、シロウトを登場させる。これは人生の「夢」を失っている日本人のいまの姿ではないのか。この程度の国民にはこの程度の政府という言葉があるが、僕はこの程度の国民にはこの程度のテレビしか持てないといいたい、と辛口の結論で終わっている。(T)

●何がテレビの自殺行為か?、藤竹暁「芸芸春秋」、1985年12月号。

テレビ朝日「アフタヌーンショー」ヤラセ事件に関連した考察。事件発生当時、もしもカメラが現場に居合わせなかったら、あるいは居合わせなかったとしてもカメラに収められな

かったら、ニュース映像にまとめることは出来ないというテレビが宿命的に背負っている制約を挙げて、テレビの報道番組やドキュメンタリーに演出の介入は不可欠なものであるという前提に立ちながら、アメリカ連邦通信委員会(FCC)の見解を下敷きに、よいヤラセと悪いヤラセを考えている。ヤラセの良し悪しが問われる第一の視角はその事実性であり、第二の視角はその取扱いの妥当性に求められるべきであるが、そこでテレビのもう一つの宿命的制約、すなわち、放映される時間にできるだけ高い視聴率を獲得しなければならないという制約のために、視聴率獲得競争がその妥当性をゆがめる場合が多々あると指摘する。それが視聴率競争を勝ち抜くための方策として企画、収録され放映されたのであれば、このような演出によって再現された事実は「事実」とは呼べない筈である。筆者はヤラセはテレビの宿命的制約を克服するための命綱であるから、よいヤラセをテレビからなくすことは出来ないという見地から、ヤラセは虚偽の報道という陥し穴の淵に立って如何に事実を映像化するかにテレビジャーナリストの努力と良心を求めている。また、視聴者の側にも、見巧者となって、テレビの制約を認識した上でテレビ報道番組の中の事実を見つめる姿勢を要求している。(H)

●特集・「やらせ」はスペシャルなほうがいい?、「幻の石器裸族」に白昼夢を見た人、「放送レポート」No. 77、85年11月。

「やらせ」の代名詞ともなっている「水曜スペシャル」(テレビ朝日)について元隊員が語る覆面インタビューと、同じ場所を取材したテレビ東京によるそのウソ発覚の一部始終を伝えるもの。同号「視聴者の眼」で重森孝がテレビドラマは「志が低い」と述べているが、この番組にも同じことがいえそうだ。

他には、新アルコール商戦が狙う「ヤングに、女性に、昼間から」の危険が、生活文化企業の名のもとに文化を装ったコマーシャルをタレ流す酒メーカーとテレビ局に世論の力で自主規制を求めていく必要を訴える(加勢和昭)。また「トイレなきマンション」を売り込む原発PRの暴走」でも、政府、電力会社、自治体の'84秋のキャンペーン一覧表を掲載し、マスメディアを使ったPR合戦の犯罪性を告発している(筆者は小泉哲郎)。(K)

●祭りのあとの荒廃が見えてくる、長沼石根、「マスコミ市民」No. 207、85年11月。

写真主体の新興グラフ雑誌「フライデー」「フォーカス」のスクープ合戦の激しさを「FF現象」と称し、その特徴と今後について述べている。

特徴とし「はき違い現象」をあげ、知る権利とのぞき見・公人と私人の混同等につきニュースを例に説明。FF現象の「歪み」として死者をモノとしてみる怖るべき風潮及び被疑者の扱いの人権に対する配慮のなさ、人間へのやさしさの欠如を指摘。惨事を売り物にするカメラマンや編集者の姿勢に加え、受け手(読者)も刺激にならされ感性もにぶって三者一体となりFF現象を推進していると述べ、今後を憂いている。「売れるのは良い雑誌」という企業理念のため「やらせ」も行われ、初期に見られた権力を撃つ熱気は失せ、個人の日常生活がねらわれている。(S)

●長野・地附山地滑り災害から学ぶべきは…、安田浄「マスコミ市民」No. 206、85年10月。

仕事中地滑り災害にまきこまれ、生命の危険を感じながら実況放送をしたテレビ局技術者のコメント紹介。「オビニオン長野」編集主幹の筆者は戸隠有料道路開発当時の資料から地滑り地形の確認を知り、危険の予測及び入念な避難命令の出し方の必要

性を説く。地滑り報道の仕方については、各社で写真・VTRによる取材が多く情報性は高かったが、地域向けテレビ情報については二次災害の恐れや死亡者の氏名発表など住民に密着した内容が欠けていたと指摘。さらにマスコミの取材合戦の行き過ぎで住民のひんしゅくをかかった状況にふれ、取材のモラルを問う。(S)

●特集・元気が出るテレビでテレビに元気が出るか、「広告批評」№76、85年10月。

4月から始まった「元気が出るテレビ」(日本テレビ系日曜夜8~9時)をとりあげ、社長インタビュー、社員の横顔、仕掛人インタビュー、元気商事85年上期営業報告、別役実と川崎徹の対談等で構成する特集。

「当初は会社ドラマという設定だったが、キャストだけ残して現在のバラエティ番組となった。企画は思いつきや個人的趣味嗜好でやっておりヘイトコールを利用してショーアップしていることもある」番組制作者の伊藤輝夫。

「子どもの遊びの感覚で大人がやるとうなるという感覚」「飲み屋で酔っぱらってワイワイやっている話をそのままテレビでやっているようなもの」「台本はあるがほとんど見ない。見るのは進行表だけ」社長役のビートたけし。

「面白がり方の研究と言ったらいいのかな。番組を作っている人たちがどう面白がるかという一本の線だけで作っている感じがあって、ある清潔さという壮快さみたいなものを感じると同時にあるそらおそろしさも感じますけど…」別役実。

「元気が出るテレビのような番組がうまく続いてくれるとテレビにもっと元気が出てくるんじゃないか」と手放して喜ぶ編集長・天野祐吉の企画。そんなにいいんでしょうかね。(J)

●特集・テレビより本を、「サインズ オブザ タイムズ」85年10月。

テレビを見るのと本を読むのでは脳の発達、働きの上でどのように違うのかについて大脳生理学の権威・高木貞敬氏にインタビュー。

脳の大切な部分は前頭前野と頭頂連合野で、創造、意欲、向上心、いわゆる「やる気」をつかさどるのが前頭前野である。テレビはこの前頭前野に対してむしろマイナスに働く。視聴率を上げる為のみ考えた浅薄な内容のテレビを受け身になってぼんやり見ていると、この部分の発達は期待できない。積極性、能動性がテレビにより失なわれる。反対に、本を読むことはそこに意志が働いているし、立ち止まって考える事もできる。この立ち止まって考える事を筆者は推めている。せめて一つの番組が終わったらスイッチを切って考える事を推めている。(B)

●特集・変わりゆく子どもの世界、「放送研究と調査」85年7月号。

3才から12才の男女の遊び、持ち物、テレビ感を調査した興味深い報告。わかりやすい表とデータ分析とで親たちの子ども時代と比べながら変わりゆく子ども像をとらえている。

特に男の子の遊びがゲームウォッチ、マイコン、パソコンと電子化の方向に進んでいる事に注目している。それに比べ、女の子の遊びや欲しい物はあまり大きな変化がない。

「アニメ番組は子どもたちにどう見られているのか」では子鹿物語、小公女セーラ、キン肉マンの3本をとりあげ、母と子両方にモニター調査している。子どもまたは母親がどのような状況で、どのアニメをおもしろいと思ったか、視聴中の子どもの熱中度はどのように違うか。小公女セーラと小鹿物語を見る子どもは、視聴中母親と話をすることが多く、キン肉マンを視聴中の男の子はくいいるように見ているが、歌を口ずさんだり、登場人物の動作と共に体を動かすなど動的、静的反応が見られるという。(B)

●「メディア教育」を考える/「青少年」、青少年育成国民会議、85年8月。

①メディア教育とは、高桑康雄。メディア教育とは何かをかみくだいて説明している。その内容は④テレビの見方の訓練等のメディアの読み方、⑤メディアを比べ選び活用する能力を育てる、⑥メディアを使い「送り手」としての経験を持つ3点をあげる。欧州、米国のメディア教育の流れにふれた後、日本の現状としてFCTの活動及び放送文化基金による2つの研究を紹介している。

②アメリカにみるメディア教育の実際、鈴木みどり。米国のメディア教育のカリキュラムを具体的に紹介する。④母親中心の市民活動グループ「ワシントン子どもとテレビ協議会」の作成した小学生向け講座から視聴習慣の点検及びアニメーションマンガの暴力についての講座。⑥サウスウエスト教育開発研究所の開発した小学生向け副読本(絵本)より「スージーのこわれたテレビ」の内容紹介、⑦ファーイースト教育調査・開発研究所の中学生向けカリキュラムよりファミリーガイドの紹介。これはクイズ方式も取り入れ家族と一緒にテレビについて考えるように作られている。(S)

●ニューメディア時代における視聴覚教育、「視聴覚教育」85年11月。

①メディア教育の必要性とあり方、吉田貞介。筆者は情報の多量化、多様化に伴い、教育の場でも学習者が学習のための情報やメッセージをどのように受けとるかという観点での視聴覚教育が必要と述べる。特にコンピュータ、ニューメディア等の窓口となるブラウン管を通してのメッセージに対する教育の必要性をとく。

②メディア教育の必要性、浜野保樹。メディア教育の必要性を米国の教育改革に関する報告書(83年)及び日本の政府関係文書(81年~)を提示し述べる。教育がメディアによる間接経験に依存している以上、メデ

ア教育は必要だが、コンピューターは電子計算機ではなく、メディアであるという認識がメディア教育にとって重要という。(S)

●女性雑誌の日米墨比較研究、女性雑誌研究会、85年7月。

女性文化の国際化現象を推し進める上で重要なメディアとなっている女性雑誌を日本、アメリカ、メキシコの三国で比較するために行った内容分析調査の結果を中心とする報告書。誌面構成分析、ページ建てにみる三国比較、編集者インタビュー、登場人物分析、COSMOPOLITANの三国比較など。

本報告書の特徴づけているのは大分類5項目中分類26項目小分類48項目という詳細な内容分析と、しかもこの分類基準を用いて日本6誌、アメリカ5誌、メキシコ6誌の各半年分の女性雑誌を分析対象に取り上げていること。大変な作業量であったことがしのばれる。

誌面構成でみる三国の違いは広告ページの多いのがアメリカ(Ms誌は例外)、少ないのはメキシコで、日本はその中間である。広告の中味はアメリカとメキシコが実用第一、日本はイメージの要素が強い。記事の言及分野をみると、日本はファッションのページ、アメリカは食と医、メキシコは芸能が多い。美容・ファッションの項目、特にその小分類項目の痩身整形はすべての雑誌で扱われており、中でも「女性自身」ではこの項目に分類される記事が多い。政治、経済、社会に関する記事はアメリカのMs誌を除いて少なく、この領域への無関心は女性雑誌の大きな特徴となっている。(J)

●大衆雑誌に見られる「人間関係術」(その1)、諸橋泰樹、「臨床心理学研究」vol.23、No.2、85年10月。

筆者は女性雑誌研究会(代表・井上輝子)のメンバー。同会による上記研究から明らかになったことの一

つに古いや血液型、人生相談、カウンセリング、心理・性格テストの多さということがあるが、筆者はそれらを「人間関係術」と総称して、その分析結果を検証し、そこに見られるマニュアルの科学指向を批判的に考察している。

20~28歳独身女性向けCOSMOPOLITANを例にとると、①コンプレックス、深層心理、性格分析といった心理学用語がふんだんに登場し、②IQなどの専門用語が脈絡なく安易に使われており、③保険管理センター研究員、マインドリサーチセンター、臨床心理学助教授などの「肩書き」が頻繁に登場して真びょう性を高める効果を発揮し、④…学といったように何に対しても「学」を安易に冠してハウトゥ=学問のマニュアル化を行っている。(M)

●今、テレビドラマは何を描いているのか、村松泰子、牧田徹雄、「放送研究と調査」、85年9~11月号。

1昨年11月中旬に放映されたテレビドラマ45本について、ドラマが描いている人間像、及びドラマの描く家庭像を探り出すべく内容分析調査を行った報告である。

調査方法は、番組内容の特性、主要登場人物の特性、登場家族の特性を10年前に行った調査と比較可能な部分是对比させながらすめられている。例えば番組内容については、①女性を対象としたドラマの本数には変化がないが、そこに描かれる女性はより新しく多様になってきている。②テーマとしては高校生同志の愛や性を扱ったものが多い。また、③家族内の確執、親子関係の葛藤を描く傾向が出てきている、など。

登場人物の分析では、既婚女性が主役になるドラマが増えたこと、主役の女性は新しい強い女が魅力的と描かれ、男性は人間的な暖かさの魅力が役柄として尊重されている。

家族の描き方としては、父子、母子家庭の登場が目立ち、有職の主婦

が描かれている場面は少ない。有職の場合は自営業が多く夫とともに経営している例が多い。親子関係としては、息子に干渉している母親の描写頻度が高く、テーマとしても、いじめや登校拒否、離婚、などいま社会的に問題とされているところにしぼられている。全体としてテレビドラマは現実志向の度を強めつつあるようだ、と結ばれている。(T)

●女と仕事の本、1945-1974年国際女性学会編、勁草書房、85年11月。

有職の女性が増加する一方の現状のなかで、21世紀に向けて女と仕事の状況はどう展開していくのであろうか。戦後を基点とした1945年から始めて、女性のあり方を出来るだけ客観的にとらえようと文献リストに作成したのが本書である。今後ずっとこの作業を続けていくうえでの第1巻として刊行されたもの。

内容は、対象年間に出版された図書の中から女性と仕事に関する文献を押出し、その中から175冊を選定して解題を付してある。例えば、奥山えみ子「共働きのもんだい」明治図書出版、1971年、153頁、(双書婦人教育労働者1)と挙げて、論文内容について1頁をかけて説明解題を加えてあるので、わかりやすく使いやすい。多くの政府刊行物資料、例えば東京都の調査結果など、一般には目にふれにくい報告を多く含んでいるのも利用価値がありそうだ。(T)

●ウィメンズブックス16、17号、松香堂書店、85年9月、11月。

日本では数少ない女性関係書籍専門店が発行する、女性の為の本と情報会報誌。「目録」では16号論争(フェミニズム・母性・家事・主婦)、17号全集・講座・シリーズというように毎号特集を組んでおり、資料・雑誌・目録・復刻も載せていて親切。「最新刊案内」は性・からだ・心理・女性史・評伝・自伝、女性論、世界の女性、結婚・家庭・家族、老後問

題、法律・労働・経済、戦争と女、メディア・消費、ドキュメント・エッセイ、資料・雑誌に分類し、紹介している。(K)

●特集・なぜ家庭科は男女共学か、季刊「女子教育もんだい」№23、85年4月、労働教育センター。

家庭科教育をその背景となる男女平等の思想、教育基本法の理念の面と、教科としての内容検討、指導方法などの実践面の相方から次の各氏がまとめている。

①男女共学は平等の不可欠な条件について、丸岡秀子②日教組の男女共学家庭科の構想-第一次案について、奥山えみ子③教育基本法第5条と女子教育、山住正己④家庭科教育実践-小学校(加藤敏子)、中学校(青木和美)、高等学校(山本ちず子)。さらに座談会「国連婦人の十年と女子教育」(陣峻淑子、佐藤洋子、仲野暢子、星野安三郎)で女子教育と共に男子教育の必要性も論じている。(Y)

●西暦2000年の新聞メディア総合見通しアンケート：調査結果基本集計、日本新聞協会研究所、85年10月。

同研究所が83年9月から着手してきた「新聞メディアの中・長期ビジョン総合研究」の一環として行われた。(調査期間：85・6・25～7・31、対象：協会加盟の新聞社・通信社118社の代表・幹部及び責任者など1,910人、回答者1,288人、うち女性8人)

①2000年の情報市場と新聞、②2000年の新聞、③2000年の新聞社、④ニューメディア時代と新聞、の構成で大規模な送り手側の将来見通し、意識調査となっている。ライバルは相変わらずテレビで、内容は地方・スポーツ・レジャーに重点を置き、婦人・解説・企画ものが増加。ターゲット

は高齢者・主婦などというのが前半での予測。後半にはニューメディア対応としての総合情報センター化(データ・バンク)への転身願望がはっきりと表われている。読者から情報を吸い上げ管理活用しようという姿勢、送り手としての女性・高齢者の無視などが見られ、新聞メディアの近未来戦略の問題点を多々感じさせる。(K)

●サバイバル、ノリ・ハドル、大谷堅志郎・石川旺訳、サイマル出版会、1985年。

アメリカの環境保護・反核運動家である著者が従来の「対決的で敵対的な平和運動」に行き詰りを感じ、他の人々の聞き手の側に回り、市民の内奥の希望や恐怖を理解して人間的共通部分をたしかめ合うなかで互いに目ざめ、建設的努力の方向を見出してゆく行き方があるという信念を持ち、この信念を全米各地の四百人もの人々とのインタビューの中で確かめようとした実践の記録。水爆開発のテラー博士から、国連速連代表部職員、スリーマイル島の住民など巾広い分野の人々が、卒直に自己の内面や人格のルーツをさらけ出しながら、最も人間的な言葉で、最も現代的で根本的な問題を語っているが、それがきわめてラジカルで刺激的な問題提起となっている。著者はこのインタビューの基本質問事項として次の5つを掲げている。①あなた自身とその仕事を、特に国家と地球の安全保障の増進という見地から、②アメリカと世界をどうしたらより安全な場所にできるか、③未来がどうあってほしいか、④どうしたら軍拡競争をストップさせ軍縮の方向に向わせられるか、⑤第三世界との関係はどの様にして改善でき

るか。(H)

●ICPCニュース第6号～9号、海外市民活動情報センター、85年7月～10月。

野村かつ子さんを代表に、市民レベルで途上国世界に力点を置いた情報活動を行っている海外市民活動情報センターはいま、コンピューターを導入して意欲的な活動をくりひろげている。活動の内容及び報告は、月刊のICPCニュースで知ることが出来る。ワープロ制作、12頁だて、写真入り。6号～10号のおもな内容は・海外における日本企業は平均5%の誇大表示を行っている、・後退するアメリカの食品安全行政、・スパイ防止法を見過してはおけない、(6号)、・世界の声を池子へ、・アスピリンで子供を殺さないために、・国連でついに消費者保護ガイドライン成立、・国連婦人の10年について語るフィリピンの消費者運動のリーダーアマルゴさん、(7号)、・コンピューターで国際会議に参加、・アメリカ「たばこ戦争」を見る、・多国籍企業になぜ労働法の適用を緩和するのか-マレーシア、・ICPCはいまなにをしているか、・ナイロビ会議と第三世界の女性、(8号)、・反消費者的内容のプロダクトライアビリティ法葬られる-アメリカ、・第三世界との共生を目指すFIOH、・ユタ州立大のアスパルテムの実験結果をいち早く入手、・市民運動の連帯とデータベース機能-丸山尚(9号)。

◆ ◆
データバンクへの情報、資料をお寄せ下さい。またガゼットの特集テーマへの提案、ご意見、ご感想もお待ちしております。バックナンバー内容一覧表を作成しました。ご活用下さい。